

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の 教育



新連載

子ども文化の詩学

好評連載

保育の中の物語

園長のまなざし

フレーベル館創立100周年記念出版

# 倉橋惣三文庫 <全10巻>

倉橋に学び、保育を極める。  
日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、  
倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋研究の第一人者・森上史朗の名著「子どもに生きた人・倉橋惣三」の改装版

## 倉橋惣三文庫⑨

### 倉橋惣三・その人と思想



坂元彦太郎／著

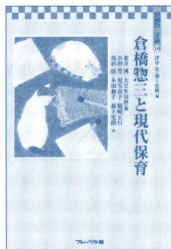
- 第一章 序奏
- 第二章 颯爽たる出発
- 第三章 多彩なる開花
- 第四章 華麗なる遍歴
- 第五章 豊饒なる結実
- 第六章 暗鬱なる洞穴
- 第七章 晩年の光芒
- 第八章 終曲

10809

18×12cm 216頁 定価1,260円(税込)

## 倉橋惣三文庫⑩

### 倉橋惣三と現代保育



荒井冽・大豆生田啓友

小田豊・児玉衣子  
高杉展・本田和子  
森上史朗／著

10810

18×12cm 200頁 定価1,260円(税込)

好評  
発売中!!



### ① 幼稚園真諦

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 148頁 定価1,155円(税込)

### ② 子供讃歌

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 236頁 定価1,260円(税込)

### ③ 育ての心(上)

倉橋惣三／著

18×12cm 180頁 定価1,155円(税込)

### ④ 育ての心(下)

倉橋惣三／著 大豆生田啓友／解説

18×12cm 244頁 定価1,260円(税込)

### ⑤ 幼稚園雑草(上)

倉橋惣三／著 柴崎正行／解説

18×12cm 276頁 定価1,260円(税込)

### ⑥ 幼稚園雑草(下)

倉橋惣三／著 上垣内伸子／解説

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

### ⑦ 子どもに生きた人・ 倉橋惣三の生涯と仕事(上)

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

### ⑧ 子どもに生きた人・ 倉橋惣三の生涯と仕事(下)

倉橋惣三／著 森上史朗／解説

18×12cm 204頁 定価1,260円(税込)

キンダーブックの

# フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第108巻 第2号



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第108巻 第2号

巻頭言

引き受ける父親

井原成男 4

新

子ども文化の詩字(一)

生まれたての言葉

森下みさ子 8

「幼児の教育」ネット公開に寄せて(2)

「幼児の教育」誌に見る

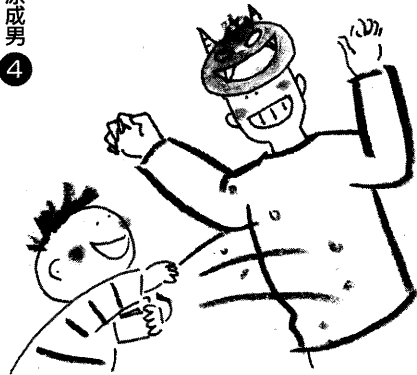
幼児期の科学教育に関する記事

瀧川光治 14

園長のまなざし 第2回

粘土作品の陰に感動あり

菊地妙子 20







研究

「言葉にできない知」を伝えること……………川口陽徳 22

保育中の物語 (2)

く・や・し・い! ……………岸井慶子 30

最終回

音波鳥便り (4)

ひと針ひと針……………田内英理子 34

最終回

上海⇄東京 子育てメール便 (7)……………橋本雅子・津守多美 38

発達心理学者の子育て奮闘記 (6)

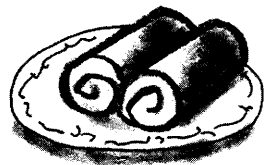
赤ちゃん返り……………長田瑞恵 44

保育の現場から

心弾む日々を重ねて……………阿蘇亜希 50

お茶の水女子大学「幼・保・太」連携保育研究の試み (26)

アメリカ合衆国の保育事情・保育思想 (1)……………塩崎美穂 56





## 巻頭言

# 引き受ける父親

井原成男

最近、ここ二十年くらいにわたって育児雑誌に書いたり育児について講演をしたりした記事を、『育てなおしの子育てカウンセリング』（井原成男著、福村出版、二〇〇八年）という本にまとめました。ちょうど下の息子が二十歳を迎えたので、私の子育て歴も二十年を超えたことになります。自分の子育てと並行して、小児科の心理臨床の仕事をしてきましたので、息子が成人を迎えたところで、私の父親兼カウンセラー業も一段落したことになります。このことはこの二十年を振り返るよい機会でした。今回は、その本を作るプロセスでさまざま考えたことを、次のステップのための里程碑にしたいと思います。

初め、このような古い記事を出版することにはためらいましたが、周囲の意見を聞いてみて、育児の本質は何ら二十年前と変わっていないと感じました。一言で



いうと、「子どもの育ちゆく環境をできるだけ良質なものにし、子どもの心を抱える環境を整備すること」です。それは、母親の胎内から始まる環境を保証し、母親が子どもを受容するのみではなく、それを支える家族や環境があることを意味します。関係者の支援体制も、イギリスの精神分析医ドナルド・ウッド・ウィニコットのいう「ホールディングな（抱え込み支える）環境」<sup>註</sup>に含まれます。これは変わりません。

大きく変わったこともあります。それは、社会情勢—派遣社員問題や若者の格差問題に代表されるように、社会構造や若者が社会に旅立つための環境は、ここ二十年の間に格段に悪化しました。そうした状況を背景にして、子どもの成長において、家族の占めるウエイトはさらに大きくなりました。今の若者に親の過保護という、かつての指摘を当てはめると、事の本質を見誤ってしまうように思います。今や、「家族」は若者の成長を保証する「最後の砦」<sup>とりで</sup>となりつつあるのです。そうした状況を背景にして、母親の重圧は極限に達し、母を支える父親の育児参加は必須のものになりました。かつて流行したニューファミリーの「ファッションのような父親の育児参加」では立ち行かなくなっています。

昨今の子育てが絡む事件を見ると、母親が果てしなき重圧を抱え込んでいるのとは対照的に、父親がまるで他人事のようにであり、わが子の状況にコミットしていない姿が映し出されることが多いようです。一言でいうと、家族という船を引



き受ける船長がいないのです。それは現在の社会が、他人の自己責任を問うのみで、自らの自己責任を放棄するという、責任放棄の社会になりつつある反映だと思うのですが、そのことについてはこれ以上深く問わないでおくことにします。

たとえば、昨年六月に起きた秋葉原通り魔事件で明らかになった事実には、一方では育児支援に大金を出資している会社が、派遣の若者に過酷な労働条件を強いていたというものがありました。そうした事実からわかるのは、かつて会社がなけなしもっていった家族主義―それによって、生産性は必ずしもよくなかったのでしょうか、「原家族」において劣悪な親体験しかしてこなかった若者を、家族主義の会社が育て直す機能をもっていたのも事実です。しかしそれは失われてしまいました。現在のアメリカナイズされた市場原理主義の台頭により、そうした自然な支援を望むことは無理になったのです。

私は比較的子育てに参加したほうで、家事や育児をこなしてきたつもりでしたが、あるとき決定的に欠けていたものに気づかされる体験をしました。それは、母親がわが子をその一身で引き受けているのに対し、父親である私は、根本的にはお手伝い意識から脱却できず、本当の意味では育児を引き受けていなかったという気づきでした。おそらく、本質的なところで母親たちが最も夫に感じている不満は、すべてを自分が背負わなければならない、瞬時にもその責任から解放されることがないという重圧感です。それはたとえば、育児の難しい発達障児をも



つ母親にとって容易に見て取れる現実ですが、そうでない親にとっても、困難に遭遇したときに共通してもつ感慨ではないでしょうか。

母親が不始末をしてくし、おぞましい結果に至ると、人々は母親の心の闇に何が起こったかを追究し、理解の複雑さに立ち止まり、やがて思考を停止させます。こうした事件の原因を心に限定して追究しても無理なのです。

もしかしら事は単純かもしれない。心に闇などはなく、原因はその母親を取り巻く人々の中に、その母親の重圧を一瞬でも引き受ける人がいなかったことに尽きるのかもしれない。

私はそのことに気づいたのです。それこそ、父親が担うべき責任に違いありません。

私はこの認識をもとに、「新しい父親論」を書き下ろし、育児参加のさらなるステップにしたいと考えています。

(お茶の水女子大学 発達臨床心理学)

#### 注

『遊ぶことと現実』(D・W・ウィニコット著、橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、一九七九年)など、亡くなって四十年たっても、世界中で読み継がれている。『両親に語る』(ウィニコット著作集 5、井原成男・斉藤和恵訳、岩崎学術出版社、一九九四年)は、彼のラジオ放送に基づいて書かれており、きわめて読みやすい。



子ども文化の詩学 (1)

生まれたての言葉

森下みさ子

◆言葉の産声を聴く

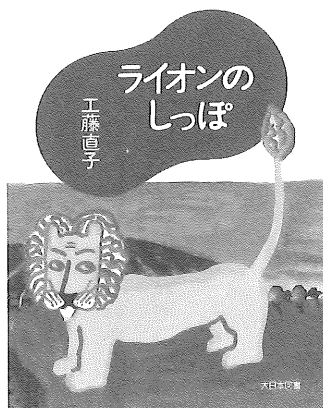
「わたしの好きな、ちいさなエピソードがあります。」と記して、詩人の工藤直子は、若い母親から届いた一通の便りを紹介しながら、次のようにつづっている。

「その子はブランコが大好きで、(公園に)行くときまずブランコに乗って、お母さんにそっとおしてもらうのを楽しみにしていました。ある日、いつものようにブランコに乗ったのですが、その子は、ふっと空を見上げて、そのままじっと、なにかに見とれている。ブランコをこ





しみだけの生かめた00



▲『ライオンのしっぽ』

ぐのも忘れて。なにがあるのかしらと、お母さんも見あげたけれど、風が吹き、広々と空があるばかりでした。ふしぎに思っ、お母さんは「どうしたの？」と、たずねました。するとその子は、まっすぐに、天を指さして、ただひとつ、「ああ」と言ったのだそうです。

『ライオンのしっぽ』より

ただそれだけ？　と思われるかもしれない。し

かし、この短いエピソードには言葉の魂にさとい詩人をして「『ことば』の持つ不思議なちからを、あらためて思い起こさせ」るだけの何かが潜んでいる。少し頭を上げて、眼前に突き抜けるように真っ青な空を思い浮かべてほしい。どこまでもどこまでも青く青く広がる空……女の子はきつと、その広がりや青さに心底打たれたのだ。大好きなブランコをこぐことさえ忘れるくらい。だから、母親に問われたとき、そうとしかいいようのない表現で、彼女は「ああ」と口にした。

それは、幼い彼女がどこかで習い覚えて何度目かに口にした「ああ」という言葉であったかもしれない。私たち大人にとっては、「青」という言葉は、何千何万と口にしてきた、言い慣らされた言葉である。しかし、ここに表れた「ああ」は、そうではない。女の子が心の底から「これが『ああ』なんだ」と驚きをもって気づき、言葉がもつ

抽象的な概念と目の前に広がるそれ（ひたすらに青い空）とを結びつけた瞬間、すなわち「あお」という言葉が、その指し示すものを得て産声をあげた瞬間が、ここには記されている。「あお」は、今ここに、空の青さを命として生まれたのである。

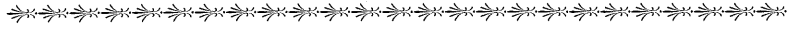
考えてみれば不思議なことだ。この澄んだ空のどこにも「あ」の音もなければ「お」の音もない。空は音もなくシンと広がるばかりである。にもかかわらず、言葉は「あ」という音と「お」という音をつなげて、この広大無辺な広がりを染める色を表わす。いつとはわからない、はるか昔に「あお」という言葉は生まれ、長い時間を経て育ち用いられてきたのだ、私たちの文化において。女の子は、自らの発見によって、太古の昔に生まれた言葉を、今ここにもう一度産む、混じりけない明瞭な発音で、「あお」と……。

子どもから発せられた、その産声に、傍らに居た母親は共振し喜び、言葉を産むことを生業とする詩人は、言葉の不可思議な力を再発見する。子どもと文化との幸福な出会いを通して、大人は言葉が生まれるときの奇跡を味わっているように思われる。

### ◆生まれたての世界と出会い

この例に限らず、真新しい感性でこの世界に入ってくる「子ども」は、限りなく詩人に近い。見慣れたこの世界も子どもたちに説明してもらおうと、たちどころに詩的な言葉が沸き立つ場所になる。小さな子どもたちがいろいろなものを説明してみせた記録には、子どもと世界のみずみずしい出会いが、言葉になって表れている<sup>2</sup>。

たとえば、「あな」。あの丸くうがたれた空隙<sup>くうげき</sup>やへこみ、さまざま大きな大きさや形や深さ、それぞれ

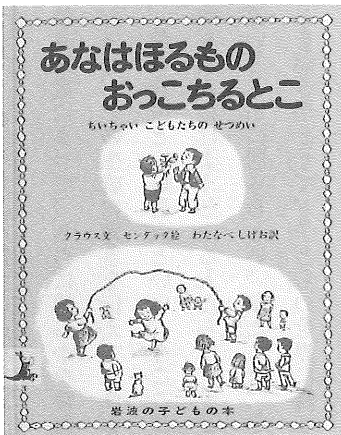


の目的や機能をどう説明すべきか戸惑う大人を尻目に、子どもたちは即座に答える。「あなは」……「ほるもの」「おっこちるとこ」「むこうがわをのぞくとこ」「はいってすわるとこ」「なにかかくすこともできるよ」と……。子どもとのかかわりにおいて、「あな」はさまざまに現れてくる。子どもたちの説明は、大人のように「穴」を一つの概念でくくろうとはしない。あくまでも自分がかかわることによって、その都度その都度とらえようとする。穴は子どもとのかかわりにおいてさまざまに大きさが形や働きをもって、そのとき、そこに生まれてくるのである。

子どもたちが答える「説明」の言葉は、自らがかかわって生まれる世界とともに、やはり「今、ここに」生まれてきた言葉たちである。あの空の気づきとともに発せられた「あお」と同じように。だから、それらの言葉は、子どもと世界の結

ばれのさなかで息づく、生きた言葉となる。

「みみ」は、今その子にとって「ぴくぴくうごくもの」であり、「て」は「つなぐために」あり、「うで」は「だきあうために」ある。「えんちようせんせい」は、何よりも「とげをぬいてくれるひと」だし、「かいだんはすわるとこ」だ。「かいがら」は、「うみのおとをきくもの」になり、「よるをながめていると」「ゆめ」が見えてくる。大好きな「どろんこ」にいたっては、「とびこんで、すべ



▲『あなほるもの おっこちるとこ  
—ちいちゃいこどもたちのせつめい—』

りこんで……」、もう表現しようがないくらい心弾む体験から「おっころりんのしゃんしゃんつてするところ」(『あなたはほるもの おっこちるとこ』より)と、泥と一体となった体のリズムを真新しい言葉に乗せて表わす。これらはみな、今ここに生じている世界との関係において、新しい輝きをもつて生まれてきた言葉ではないだろうか。

#### ◆子ども文化の詩学に向けて

いきいきと脈打つ子どもの説明に、絵本作家のモーリス・センダックは、勝るとも劣らない絵を付して、子どもが世界と出会う瞬間をみごとに描き出している。大地の声に応えるかのように棒一本でぐりぐりと「あなをほる」子ども、大きな貝殻を耳にあててうっとり「海を聴く」子ども、首まで泥につかまってまどろむ幸せそうな子ども……。子どもたちの瞬間瞬間の答えは、大人に

なってもなお子どもの感性を心の内にもち続ける絵本作家によって、さらに明らかな輪郭を得て表わされ、その生成の輝きを伝えてくれるのだ。

絵本作家といふ詩人といふ、今ここに世界の息吹を刻みつけようとする人たちは、子どもの心に近いところに居るらしい。私たちは、それらの作品を導き手として、子どもの世界に通じる路を見つけることができる。子どもの相棒として長らく親しまれてきたおもちゃ、子どもに愛され続けるお菓子、世代をわたって延々と伝承されてきた遊び、繰り返し口ずさまれる歌や物語の数々……、それらはみな、この世に来てまもない小さな人たちの心をとらえて離さない、不思議な魅力をもっている。その力とはいったい何だろうか。

子どもと世界のかかわりを、子どもの心身の育ちの過程に焦点を当ててみるなら、それは「発達」の問題になるだろう。また、この社会に加入



していくうえで必要な知識や方法を授けることに重点をおくなら、それは「教育」の範疇はんちゆうに入るだろう。いずれも子どもが育っていくうえで大切な視点であることは確かである。しかし、それらと重なりながらも、それらに回収されることのない広がりとして「子ども文化」があるのではないだろうか。

合目的にはとらえることのできない、子ども特有の感覚がこの世界と出会うところに生じる諸々の事象を「子ども文化」という視点から見つめ直してみたい。発達や教育の意味や価値を担った、子どもの成育過程を跡付ける文法に対して、「子ども特有の世界」は、それらには組み込まれない「詩的作用」に満ちている。この世界にやってきた小さな人たちが、この世界とじかに触れ合うとき、そこに生じるかわりのみずみずしさを、既存の文法を揺るがせたり覆したりする詩的

な働きとして掘り下げてみることに。ここではそれを「詩学」と呼ぼう。そして、子ども文化をめぐる具体的事象に寄り添いながら、そこから発せられる「詩的作用」をくみ取りつつ、子どもの世界の探索に乗り出していきたいと思う。

〔白百合女子大学 文学部 児童文化学科〕

単著『おもちゃ革命』岩波書店、一九九六年、

『娘たちの江戸』筑摩書房、一九九六年など。

共著『文化・交通する』東京大学出版会、

『ものと子どもの文化史』勁草書房、など。

#### 引用文献

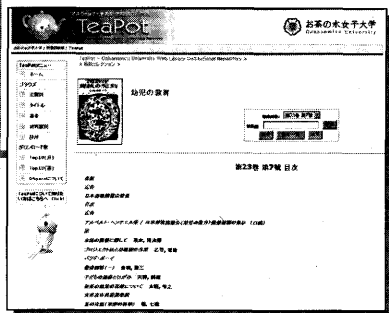
1. 工藤直子／著 長 新太／絵『ライオンのしっぽ』大日本図書、一九九四年

2. ルース・クラウス／文 モーリス・センダック／絵 わたなべしげお／訳『あなはほるもの おっこちるとこーち いちやいこどもたちのせつめい』岩波書店、一九七九年  
保育園と幼稚園の子どもたちがさまざまな単語に対してしてくれた説明にセンダックが絵を付した絵本

## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて(2)

# 『幼児の教育』誌に見る 幼児期の科学教育に関する記事

瀧川光治



お茶の水女子大学附属図書館のWEB サイト  
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ  
クション (略称 TeaPot)」にてバックナン  
バーインターネット公開中。  
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

このたび、「幼児の教育」誌がデータベース化され、誰もが手近にキーワード検索できるようになったということは、大変喜ばしいことだと感じています。私は十年ほど前から、日本の幼児教育・保育の歴史において、科学教育的な側面がどのように論議されてきたかに興味をもち、歴史的資料として、復刻版『幼児の教育』(名著刊行会)を活用してきました。その成果は、拙稿(共著含む)として、

「月刊雑誌『幼児の教育』に見られる幼児期の自然教育観の変遷」(一九九九年)

「月刊雑誌『幼児の教育』に見られる領域「環境」の科学教育史—十五年戦争下の記事を中心として—」(二〇〇一年)

「堀七歳の保育項目「観察」教育論—領域「環境」の保育史の視点から—」(二〇〇二年)

などの論文にまとめ、最終的には博士論文として『日本における幼児期の科学教育史・絵本史研究』（風間書房、二〇〇六年）に、日本における幼児期の科学教育の歴史を体系付けて整理しています。

このたび本誌の執筆依頼を受けて、私の興味のある人物名やキーワードで検索してみました。その結果を踏まえてここではこのデータベース（執筆時一九五二年まで公開）について述べてみたいと思います。

### ▼「堀七蔵」

#### 戦前に本誌の編集主幹を六年間担った人物

まずは、本誌ともかわりの深い堀七蔵（ほりしちぞう、一八八六～一九七八年）です。堀は一九二四年（正十三）年十二月から一九三〇（昭和五）年まで九年間、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事として活躍し、同時に日本幼稚園協会主幹及び本誌の編集主幹を担った人物です。また、理科教育界においては、戦

前を代表する理科教育学者として知られ、「子どもの疑問」のもつ意味を探り、それを基盤とした理科教授法に着手した人物です。保育・幼児教育史の分野における堀についての論考は、松波（一九九四年）、そして小林（一九九九年）のものや筆者のもの以外はほとんど注目されていないのですが、この機会に理系の幼稚園主事として活躍した人物を紹介したいと思います。

最初に「堀七蔵」と入れて検索してみると、結果が〇件。おかしいと思い「堀」だけで検索してみると、一〇〇件以上もヒット。結果リストをよく見ると、「蔵」ではなく「藏」となっており、クリックして、PDFファイルで紙面を確認してみると確かに「藏」となっていました。堀の自伝本でも「藏」と表記されていたのです。当たり前ですが、元の資料に忠実に文字が使用されていることに感心しました。

検索結果リストを見ると、堀の執筆した記事

は、一九一九年一月号（第一九卷第一号）の「冬の自然」が初めて、一九五二年一月号（第五一卷第一号）の「就學前の数教育」が最後となっています。その三十三年間に一三四編もの記事を執筆していることがわかります。記事のテーマは「冬の自然」「春の自然」「誰にでも出来る實驗（一）」「（四）」といった保育者向けの自然や理科の解説記事をはじめ、「幼稚園に於ける「観察」（一、其の二）」「観察のさせ方（一）」「（四）」」「○月の観察」（季節の）」「自然観察」といった保育項目「観察」にかかわる連載記事や、在外研究で一年間海外視察したことを元にした「私の視察した欧米の幼稚園教育」「私の視察したる米国の幼稚園教育」などの連載（全二十六回）があります。

堀の附属幼稚園主事時代の功績としては、自伝によると「幼稚園令」「幼稚園令施行規則」の制定に参画し、趣旨・精神の徹底に努力したこと、全国幼稚園の設備改善に寄与したこと、わくのほり（ジャングル・

ジム）を新案したことが述べられており、幼稚園令制定直後の一九二六年四月～二七年四月までの一年間、理系出身の幼稚園主事としての特別な使命を抱いて文部省の在外研究員として欧米の教育事情の視察を行ったことが述べられています。

さらに、現在のお茶の水女子大学附属幼稚園は、現園舎に一九三二年に移転していますが、それは創立当時の園舎は関東大震災で消失してしまったからです。そのため、堀の在任中は仮園舎で保育が行われていましたが、附属小学校主事に転任後においても、その移転先の園舎設計には堀がかかわっていることも述べられています。

そのような視点で検索結果リストを見ると、主事としての現場研究とともに海外保育事情などのホットな情報提供や、理系出身者としての保育項目「観察」にかかわる解説記事を多く本誌に提供しております。そして、一九三〇（昭和五）年十一月に附属幼稚園から附

属小学校に転任しましたが、その後も本誌に記事を寄せていることがわかります。

▼「科学」「理科」「観察」「自然」「環境」  
というキーワード

次に「科学（科學）」「理科」というキーワードや、「観察（觀察）」「自然」「環境」というキーワードで検索してみました。

①「理科」については、『婦人と子ども』誌時代の一九〇六年に「新夫婦の理科問答」（三回連載）で使用され、「科学」については、一九四一年以降「科学教育と幼稚園」「科学的芽生えを重んずる遊びのいろいろ」「幼児への科学教育」「幼児の科学疑問の調査」など一九四五年終戦までの間に一〇編の記事、終戦から一九五二年までに「幼児の科学教育」「幼児の科学心の教育」などの六編の記事が確認で

きた。つまり、日本の幼児教育・保育の歴史において一九四五年の第二次世界大戦終戦を挟んだ一〇年ほどの間に、「幼児の科学教育」ということが盛んに論議されたことがわかる。

②「観察（觀察）」については、一九二六（大正十五）年の「幼稚園令」により新たに付け加えられた保育項目であるが、一九〇七年五月号の「幼稚園に於ける観察的誘導」の中で、中村五六が先駆的に提案をしていることがわかる。しかし、その後「観察」という言葉が紙面に現れるのは、一九二六年の「幼稚園令」制定以後のことである。一九二六～四五年終戦までの二〇年ほどの間に、連載を含めて実に九三編の「観察」にかかわる記事が掲載されている。また、一九二六～二七年当初は和田實「保育事項としての『観察』に就いて」、平島權藏「自然界の観察」、名古屋市保育會「観察實施案」、倉橋惣三「観察に就いて」



東京市幼稚園獎學講習會の講演大要」、早川節「觀察の地方色ありのま、」などの、実施案や和田實・倉橋惣三の先達の「觀察」論が掲載されていた。

その後、一九二九年には堀七藏の「幼稚園に於ける「觀察」」の四回連載、一九三二年には同じく「觀察のさせ方」の四回連載、一九三三〜三四年にかけては「〇月の觀察」といった十一回の連載があり、一九三六〜三七年および四二〜四三年には、小島（清水）光子による東京女高師附属幼稚園「系統的保育案の實際」の解説として、「觀察」の實際例が三〇編ほど掲載されている。そして、終戦後には、一九四六年三月に吉田とみ子「晩秋の觀察（保育の實際）」、四七年八月には堀七藏「秋に行われてよい觀察遊び（秋の保育の實際）」、五一年八月には同「夏其自然觀察」といった記事が掲載されている。

③「自然」については、一九〇一年の創刊初年には

「五月の自然界」「六月の自然界」といった記事があり、その後は「保育と自然知識」（一三年）、「幼稚園と自然」（一五年）、膳眞規子の「自然物の玩具に就て」といった連載記事（二八〜二九年）などがあり、「環境」については保育環境・生活環境としての山下俊郎の「子供と環境」の五回連載などの記事があった。

以上のように、現在の五領域における領域「環境」のキーワードである「好奇心」「探究心」「自分で考える」ということにつながる記事が、創刊当時から掲載され、保育項目「觀察」が誕生してからはとくに多く論議されていることがわかります。しかも一九四五年度の終戦を挟んだ一〇年ほどの間に、「幼児の科学教育」ということが盛んに論議され、その中ではとくに「好奇心」「探究心」「自分で考える」とことや子ども自身の試行錯誤、目的意識をもってかかわることが指摘されています。

## ▼おわりに

今回、このような機会をいただいたことで、改めてこれまでの自分の研究の足跡となるキーワードをたどってみました。私自身、これまでは文献資料として複製版『幼児の教育』誌を、毎号ごとに目次のチェック、その内容の確認という手順で、調査に時間がかかっていました。ちょうど質問紙調査を用いた研究でコンピュータや表計算ソフト・統計ソフトの登場が、さまざまな統計処理に資することになったように、このようなデータベースができたことで、私のみならず多くの研究者の歴史的研究がはかどることが期待されるのではないかと思っています。また、幼児教育学・保育学の先達の論考や実践がインターネット上で検索でき、PDFファイルで見られるということは、保育者養成教育の教材としての積極的活用という道も広がるのではないかと期待しています。

(樟蔭東女子短期大学・生活学科保育学専攻)

## 参考文献

松波淑子

「堀七蔵の保育界における事績」日本保育学会第四十七回大会研究論文集、一九九四年

小林明子

「昭和初期の保育者たち(1)―東京女高師付属幼稚園―日本保育学会第四十九回大会研究論文集、一九九九年

栗原直子・

瀧川光治「月刊雑誌『幼児と教育』に見られる幼児期の自然教育観の変遷」聖和大学論集第二十七号A、二〇三―百十八頁、一九九九年

瀧川光治

「月刊雑誌『幼児の教育』に見られる領域「環境」の科学教育史 ―十五年戦争下の記事を中心として―」聖和大学論集第二十九号A、一七五―一九〇頁、二〇〇一年

瀧川光治

「幼児期科学教育史研究(4)・堀七蔵の幼児教育界における功績」日本保育学会第五十五回大会研究論文集、二〇〇二年

瀧川光治

「堀七蔵の保育項目「観察」教育論―領域「環境」の保育史の視点から―」『乳幼児教育学研究』第11号、八十一―九十六頁、二〇〇二年

瀧川光治

「日本における幼児期の科学教育史・絵本史研究」風間書房、二〇〇六年

堀七蔵

『教員生活七十年』(自費出版 制作・福村出版)一九七四年

# 園長のまなざし

## 第2回

### 粘土作品の陰に感動あり

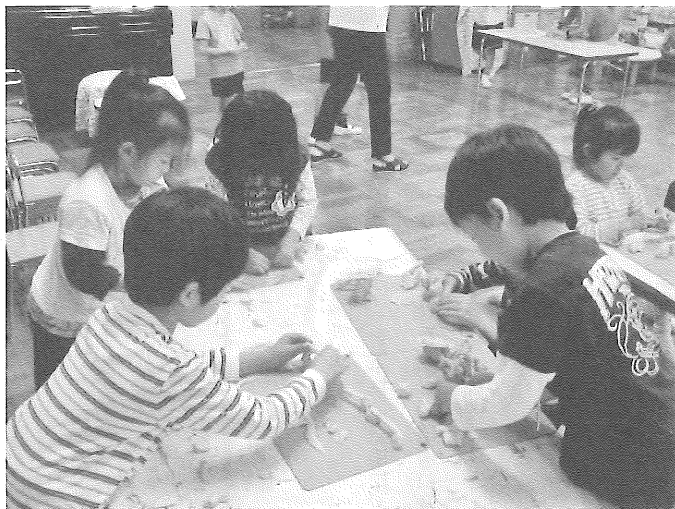
菊地 妙子

年長組の保育室の前を通りかかると、何やら楽しそうな子どもたちの声が聞こえてきます。のぞいてみると、粘土遊びをしているところでした。

「ねえねえ、ここに園庭作って合体しない?」「いいねえ、そうしよう。虫々ハウスも作ろうぜ!」「すげえ!」「鉄棒はここだな」「ぼくが鉄棒してるところ」と、会話が飛び交っています。

見ると、粘土板の上に素晴らしい粘土作品の数々! パーツを組み合わせて作った「走る自分」とリレーのコースやバトン。そして、バトンをつないでいる自分と友達、自転車に乗っている自分、縄跳びをしている自分も創られています。どの作品も生き生きとしていて、まるで子どもたちの動きそのものです。

子どもたちの表現力に感心していると、A児への担任の声かけが聞こえてきました。「鉄棒しているところ作るの、いいわねー。前に鉄棒できなくて頑張ってたところなんか、いいんじゃないの?」と。前まわり



が最近できるようになったA児は、顔を輝かせて取り組み始めました。立体の鉄棒を作り、鉄棒に乗っている自分も作って完成です。粘土で作った自分を動かしながら、「見て見て、こうやって前まわり頑張ってる」とこ「ほんとだ」「あつ、落ちるー」「アハハハ……」。友達と会話するA児の楽しさ、喜びが伝わってくるようでした。

この粘土遊びの発端は、夢中になって『リレー』をしている子どもたちに、担任が「走る自分を創ってみよう」と投げかけたものでした。その活動の発展としてこのようなさまざまな粘土の作品が生まれました。

子どもたちが自分の体で感じ、心で感じたことが粘土を通して見事に表現され、見ている者も心弾むような出来栄えになったのです。表現活動の陰に感動あり、そして子どもたちの心に寄り添い感動を引き出す保育者の存在あり、ということを改めて思ったひとこまでした。

(東京都 文京区立湯島幼稚園)

## 「言葉にできない知」を伝えること

—「わざ」の世界から学ぶ—

川口陽徳

教えてくれない？

最近、私に通っている合気道の道場に、新しい入門者がやってきました。真新しい道着に身を包み、さあやるぞと気合充分な様子なのですが、張り切れば張り切るほど、初めは戸惑うことになります。

それは、誰も教えてくれないからです。普通、中学校でも高校でも、学ぶことは教えてもらうこととセットになっています。教科書の内容を覚えること

や、先生が教えてくれることを理解しようとするところが、学ぶことであるわけです。

ところが、合気道ではそうではありません。具体的な指導はなく、「まねしてください」とだけ言い渡され、呼吸法、体操、「わざ」の稽古とどんどん進んでいってしまうのです。そんな中で、もう、何がなんだか、まねをしようにも何を見ればいいのかさえわからず、ギクシャクと身体を動かしている入門者の姿を見ると、思わず教えたくなくなってしまい



ます。ですが、そこは我慢。私もやはり教えません。

これは、意地悪なのでも何かを試しているのでもありません。逆説的ですが、「教えないこと」は一つの教育の方法なのです。もちろん、それには理由があります。「わざ」と呼ばれる伝えるべき「知」が、「言葉にできない」という性質をもっているのです。

今から始めるこの小さな文章では、合気道の稽古での私の経験を手がかりにして、「わざ」の世界の、「言葉にできない知」を伝えるための工夫について見ていきたいと思えます。

### 身体が知っている

合気道の世界は身体で覚える世界です。師匠はいつも、「頭で考えるな」と私に言うのですが、それは簡単なことではありません。考えるのをやめられないのが難しいところで、「まずは相手の右手首をつかみ、ほぼ同時に右足から踏み出し、それから相

手の正面に入ってサツと反転。そのときの目線には注意しなくっちゃ」など、師匠の動きから自分なりに抽出したチェックポイントを、頭で確認しながら動いてしまうのです。でも、そんなことを考えていると反応が遅れてしまいます。そして、焦って固まってしまったりするのです。そのため、師匠には怒られてばかりいました。

そんな中でも、何度か、「その感じだ」と褒めてもらえるときがありました。妙な話なのですが、褒めてもらえるのは、自分としては調子がよくないときばかり。しばらく道場から遠ざかっていた後の久しぶりの稽古や、寝不足でフラフラしているようなときに限って、「いいぞ」と言われるのです。

確かに、そのときの私はあまり考えていません。調子が悪いので、「何とかなるだろう」と相手の仕かけを待っているだけなのですが、不思議なことに、そのときの方が身体は自然に動くのです。それ

は、とっさの反応のような感じで、「なるほどなあ、身体が知っているとはいくことか」と、自分のことながら感心してしまいます。どうやら私は、「わざ」を体得しつつあるようなのです。

そもそも、私が合気道を習い始めた動機には、言葉にできない「知」である「わざ」への関心がありました。「わざ」とは何か。「わざ」をどうやって学ぶのか。それを自分で経験してみたい。そんなことを思っただけの扉をたたいたのです。

この問いは、近代の学校教育が避けてきた課題です。ペーパーテストで理解を確かめる入試制度からも明らかなように、学校では、「言葉で説明できるかどうか」が重視されてきました。しかし、それは理解の一つの位相にすぎません。私が合気道で経験してきたように、「メカニズムを説明できなくてもできる」という理解の位相もあるからです。自転車の乗り方や泳ぎ方、歩き方なども、この後者の理解

といえます。説明はできなくとも、私たちは実際に泳ぎ、歩くことができます。このような「説明できないけれどできる」、「身体で覚えている」という事態も、もちろん「知っている」という状態の範囲に入りますが、近代の教育は、こういった理解についていねいに考えることを怠ってきたといえます。

### 見習う、盗む、まねる

—そして、形より出でよ

合気道の「わざ」は言葉にできません。言葉にできない「わざ」は体得するしかありません。師匠を見習え。盗め。「わざ」の世界は、弟子が師匠の模倣を繰り返すことによって「知」を受け継いできました。このような世界の稽古では、師匠の動きを「まるごと」まねることがなされます。私の道場の場合、入門した直後は受身の稽古だけが続き、それが終わるとすぐに、熟練した先輩たちを相手にした

いきなりの「わざ」の稽古が始まりました。

これは、西洋的な技術の伝達とは異なるやり方です。たとえば、ピアノのレッスンでは、右手、左手、両手と学ぶべきことを要素に分解し、順を追って学習を進めていきます。合気道では、足や手の動きだけを集中的に繰り返すようなことはせず、「わざまるごと」の模倣に最初から取り組むのです。

しかし、たとえ、弟子が師匠の「動き」を完全にコピーできるようになっても、それは「わざ」の習得ではありません。ややこしいところなのですが、師匠の「動き」の模倣が目指しているのは、実はその「動き」自体のたんなる再現ではなく、「動き」の意味や必然性を理解したうえで再現なのです。

ここでも合気道を例に取り、具体的に考えてみましょう。合気道の「わざ」の大枠は次のような感じになります。たとえば、師匠が私に「わざ」を掛ける場合、まずは私から、突いたり手刀で切り下ろし

たり、師匠に攻撃を加えることから始めます。そうすると師匠は、私の力を利用しながら攻撃をさばいて崩し、最終的には、抑えや固めなどの方法で決めてしまうのです。稽古はこの様子を見ることから始まりです。そして、師匠が何度か繰り返す姿を見た後、弟子たちはペアになり、役割を交替しながら、自ら「わざ」をやってみるようになります。

では、師匠の「動き」のコピーが目的になると、何が起きるでしょうか。どれだけ正確に動いても（つまり、師匠の「動き」を完璧に再現しても）、攻



撃してくる相手の突く位置や早さが変わってしまった  
ば、その攻撃をさばくことはできません。突きをま  
ともに食らうか、離れすぎて「わざ」に入れない  
か、そのどちらかで終わってしまうことでしょう。

これは、「動き」の再現にとらわれ、「わざ」を行使  
する根源的な理由、「相手の攻撃をさばく」という  
意味を見失っているから起こるのです。

さらに、より厳密に考えるなら、同じ「わざ」を  
見ているというのはい込みで、実際には二つと同  
じ動きはありません。師匠の動き自体が、常に相手  
の攻撃によって変化せざるを得ないからです。そう  
考えると、師匠の「動き」の完璧なコピーとは、あ  
るときの、一回きりの「動き」のコピーであつて、  
そんなものは「わざ」の習得とは程遠い、役に立た  
ない「動き」であるということになります。

そのように、師匠の模倣は再現が目的なのではな  
く、学びの方法であるといえます。最終的な狙い

は、「動き」の向こう側にある意味や必然性の体得。  
必然的に生まれた意味ある動きこそが、相手の変化  
に自在に応じられる「わざ」なのです。このような  
「単なる動き」の模倣から離れ、「意味のある動き」へ  
と向かうことを、芸道の世界は「形より入って形よ  
り出る」や「形から型へ」などと語っています。

### 「一緒に暮らすこと」の意義

私が通う道場は違いますが、本来、「わざ」の世  
界は、師匠の家に住み込み、生活を共にする中で学  
ぶのが常でした。いわゆる、徒弟制度、内弟子制度  
です。それは、共に暮らすことや環境が与える影響  
が重視されていたからなのですが、では、その中  
で、弟子は何を学んでいたのでしょうか。

稽古は後回しにされることが多かったようです  
が、それでも内弟子になることには意味がありまし  
た。師匠の家にいる限り、ほかの弟子が稽古を受け

る声や音曲の調べなども耳に入ってくるからです。内弟子にとつては、日常生活そのものが稽古の時間であり、「門前の小僧、習わぬ経を読む」のごとく、さまざまなことを身体で覚えていったのでした。

また、一緒に暮らすことで「師匠の考え方」がわかるようなもなつてきます。たとえば、宮大工の小川三夫は、生活を共にする中で、師匠が何を感じ、何に反応し、どう考えているかを知らうとしたと語っています<sup>註</sup>。宮大工も典型的な「わざ」の世界ですが、「師匠の考え方」を知ることが、教えようとする師匠の言動の、真の意味を理解するために必要なことでした。小川は、最初はわからなかった「納屋を掃除しろ」という言葉が、実は「そこにある<sup>かたな</sup>鉋屑や道具を見て学べ」という意味であったことに気づいたと述べています。もし、「師匠の考え方」がわからない場合は、真意に気づかず、納屋の掃除だけを、いつまでも続けていたかもしれません。

一緒に暮らすことの意義はまだあります。師匠の生活そのものが「わざ」の世界の「知」であり、学びの対象だったので。宮大工の生活では、仕事の後に道具を研いで翌日に備えるのが日課でした。合気道の世界では、朝晩に呼吸の鍛錬をせよと言われてきます。このように、「日常生活」と一言で言ってしまうと見えにくいのですが、職人には職人の、武道家には武道家の日常生活があったのでした。

入門したばかりの弟子にとつては、新しい日常生活は勝手の違う非日常的なものに感じられたはずで、内弟子として師匠と暮らす中で、その世界なりの日常生活の仕方を身に付けることも、「わざ」の継承において重要なことであつたのです。

### 言葉が経験の邪魔をする

#### — 教えない教育の理由

最後に、「わざ」の世界の言葉の話です。繰り返

してきたように、「わざ」は言葉にできません。しかし、部分的な記述であれば可能なはずです。実際、「転換のときには目線が大事」や「四方投げ裏のわざは深く入れ」など、稽古の合間に師匠がアドバイスをくれることがあります。それを「わざの要諦」としてまとめるとはできませんが、師匠がそんなものを配布することはありません。

どうやら問題は書き留めることにあるようです。書き言葉の使用を意図的に避けているのです。いろいろな資料をひも解いていくと複雑な問題が見えてきたのですが、ここでは一つだけ、「言葉が経験の邪魔をする」という事態について触れたいと思います。

再び宮大工の小川ですが、小川は寺を見学にくる学生が見ているようで実は見ていないと言います。彼らは「平安時代の建物の軒は美しい」というような知識を事前にもっているせいで、それが本当に美しいかどうか感じようとしなないのです。これ

はつまり、事前に与えられた知識が経験を阻害しているという事態です。その代わりに行われているのは確認作業。学生は、書物か何かで得た情報を、実際の建物を前にして確かめているだけなのです。

経験を積むことが「知」の伝達の核である「わざ」の世界にとつては、言葉が経験の邪魔をするという事態は致命的なものでした。そこで「知」を書き留めることが禁じられ、弟子が経験できる環境が守られてきたのでした。この文章の冒頭で触れた「教えない教育」の意味も、こういった言葉と経験の問題を考慮した、一つの教育の方法であったのです。

### 「わざ」の世界の教育から 見えてくること

断片的ではありましたが、合気道での経験を切り口に、「わざ」の世界の教育を見てきました。ここで触れた話は、私が考えてきたことを含む、「わ

「わざ」研究の成果の一端です。「わざ」の世界の教育は、秘伝的で前近代的な話として、あまり議論がなされてこなかったのですが、近年、研究が進んでいます。

この研究の目的は、昔に戻れというようなことではありません。研究者それぞれに思いがあるでしょうが、さしあたり、私が目指すのは二つです。

まずは、その只中にいるために反省的にとらえにくい今の教育を、少し距離をもって眺める目、異化する目を手に入れようということです。うまく伝えられたかわかりませんが、この文章を読んだ今、これまで受けてきた教育を振り返ってみるとどう感じられるでしょうか。

もう一つは、近代的な学校教育という枠組みにしばられず、教育という営みのもつ豊かな可能性を見直したいということです。近代の教育からはみ出し、秘伝的とされてきたはずの「わざ」世界の教

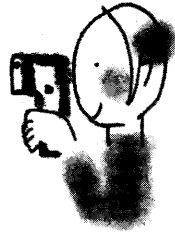
育。でも、どうでしょうか。ここまでの話を、特殊な世界の話だと感じたでしょうか。

私はそうは思いません。普段の生活でも、言葉にできないことがたくさんあります。それを伝えるための日ごろの工夫を思い出しても、教えていないことを学びながら育つ子どもたちのさまを思い浮かべても、「わざ」の世界の教育は「当たり前」であると思うのです。ただし、その「当たり前」に改めて気づくことは、なかなか難しいことではあるのですが。

(東京大学 大学院教育学研究科 博士課程)

教育哲学・教育人間学

注 本稿で触れた宮大工の話は、西岡常一・小川三夫・塩野米松／著、『木のいのち木のこころ 天・地・人』（新潮文庫、二〇〇五年）、小川三夫／著『不揃いの木を組む』（草思社、二〇〇一年）を参照しています。



## 保育の中の物語(2)

く・や・し・い!

岸井慶子

今どきこんなに悔しがる子がいるだろうか。鬼ごっこで捕まったときに、写真のような表情をして、かぶっていたカラー帽子をつかみ取り、ぐちゃぐちゃに握りつぶしたかと思うと、今度はそれをかみしごいて、体をよじるようになって怒りをあらわにし、握りしめた帽子を地面にたたきつけて、遊びの場から抜けたのだった。その表情を見ると、うっすらと涙が光っている。大またで荒々しく走った先は、鬼ごっこ全体が見渡せるブランコだ。

学級全体で数日前から楽しんでいるこの鬼ごっこは、ジャンケンと同じ仕組みで、一方から逃げつつもう一方を捕まえる三つどもえの助け鬼だ。それぞれのチームには帽子の色に合わせた青、赤、黄色のチーム名が付いている。さす





がに三年保育の五歳児らしく、ルールをしっかりと理解して機敏に走り回り捕まえたり捕まったりを楽しんでいる。捕まると相手チームに連れて行かれ「たすけてー。〇〇たすけてー」と思いきり声を張り上げ、仲間の名前を呼びながら手を伸ばし助けを待っている。まるで捕まったことを楽しむかのような。単学級で一緒に三年間、あるいは二年間を過ごしてきたからこそ培われた、何とも言えない仲間関係を感じる。

写真の男児は靖男。幼稚園の誰もが「ヤッチ」の愛称で呼ぶ、元気で体格のよい男児だ。鬼ごっこ開始時には、ほかの幼児と同様に張り切って庭に出た。鬼ごっこが始まってからも、活発に動き回り、相手を挑発したり、素早く走って赤チームを捕まえたり、仲間の女児を助けたりしていた。

それが中央付近で黄色チームの男児に捕まった。

後ろから服のすそをつかまれたのだ。ヤッチは服をつかむ手を振り払おうとするが、相手は離さない。そこで冒頭のような流れになった。

ブランコを、これでもかこれでもかと大揺れさせて、「青ぐみ まっける」を叫んでいる。何と自分のチームを応援するのではなく「負ける」というのだ。自分が抜けたのに、自分のチームが勝つなんて許せないのだろうか。

すると、いきなりブランコから降りて黄色チームに捕まっている女児を素早

く助け、手をつないで青陣地に戻ろうとした。担任に「それはずるい」と止められ、追い打ちをかけられるように「ヤッチ、だめだよ。ずるいぞ。捕まっただから」と義男に大声で指摘される。

ヤッチは、再びブランコに戻り激しくブランコをこぎながら「青ぐみ まっける」を大きな声で繰り返し叫ぶ。やがてその声もブランコの揺れも次第に小さくなり、うつむき加減のヤッチの背中は丸く小さくなっていく。一度抜けた鬼ごっこへの再デビューとしては最高の場面だっただろう。何人も捕まっている相手チームに颯爽と乗り込んで助けだす。まるでヒーローだ（つたはずなのに）。自分が抜けても、周囲の状況は何一つ変わらずみんな鬼ごっこを楽しんでいる。

さてここまでお読みになった方は、どのような感想をもたれただろうか。「五歳児の発達としてどうなの」「あと三か月もすれば小学生のこの時期、自分が捕まったからといって遊びを抜けるなんて。幼すぎる」と思われる方がいらっしゃるかもしれない。

でも、ここまで悔しがる子がいてもいいではないか。ほどほどに遊びを楽しむ「わけしり」の子どもが増えている今、私はこの直情を大切にしたいと思っただ。担任の「今までのヤッチなら部屋に帰っていた。あの場に残っていたのは



彼の成長と受け止めたい」という言葉もある。彼なりに成長もしているのだ。また、不可解だった「青ぐみ、まっける」の言葉も、「ピンチになったら、僕が助けに行くよ。そのときは僕の力を再確認するよ」の意味があったのではないかとも考えられる。強烈な自負心を感じる。

ビデオで捕まった場面を詳細に見直してみると、捕まった瞬間、ヤッチは相手の陣地に向かっている。しかしそこで義男（黄色チーム）に「タッチしたよ」と正面から宣言されている。ヤッチにしてみれば、わかっていることをわざわざ面と向かって言われ、プライドが傷ついただろう。さらに今度は、義男に後ろから服をつかまれて引っ張られている。ここでヤッチの怒りは頂点に達する。ほんの一瞬の出来事を、スローで詳細に見ることによってわかってきたことだ。

さらに、朝からの遊びの様子をビデオで見直すと、生まれ月も早く周囲の幼児からの信頼も厚い義男を中心に遊びが進むことに対して、ただ一人反対し自己主張するヤッチの姿がある。孤独な戦いを挑んでいるのだ。そう気づいて鬼ごっこを見直すと、ヤッチと義男が相手を意識していることに気づく。

わがままな幼い男児の物語が、プライド高い男児の物語に変わった。

（鎌倉女子大学短期大学部）



## ひと針ひと針



文・カット  
田内英理子

絵本やお話を一緒に読む、あるいは語り、聞くひとときは、私たち母子にとって喜びの時間です。息子たちが少し大きくなった今は、小学校や保育所に向向いて「お話の時間」を多くの子どもたちにしていきます。

「むかしむかし、あるところに……」と始まる昔話、気の遠くなるほど前から、たくさんの人々の口から口へと伝えられてきた話が書き留められ、それを読んだ私が語っているというのも不思議な縁です。ほんの数世代前には、冬の炉端で昔語りがされていたのですが、今の子にとって、語りを聞くのは新鮮なことです。絵本がなくて全く自分の想像力だけを頼りにお話を聞くと、初めは戸惑い落ち着かない子も、回を重ねるごとに語りに身を任せて聞き入るようになってきました。

また、一人で読んでいるとついとぼしてしまったり返しや呪文なども、語りの場では読み手にとって

も楽しみになります。

私は昔話を語るだけでなく、絵本や少し長い物語も読みますが、つい自分になじみ深い長く読み継がれたものを選んでしまいます。五十年、百年前のもので本当に楽しく、続きを心待ちにしている子ども大勢います。子どもたちは軽々と昔のものも外国のものも飛び越えてお話の世界を楽しんでいます。読む私にとつても、古いもののゆつたりした文体は美しく品もあり心地よいものです。

お話というと、私は『年とつたばあやのお話かご』（エリナー・ファージョン／作、石井桃子／訳、E.アーディゾーニ／絵、岩波書店）が頭に浮かびます。靴下穴を継ぐのにびつたりの長さのお話を語るばあや。じつと椅子に座って語ることになかなか慣れない私は、縫い物を持っていたらどうだろうと考えたりします。

私は、上手ではないけれど繕い物が好きです。教

育実習でお世話になった幼稚園で「草や木のまじゅつ」（山崎青樹／文・絵、石曾根史行ほか／写真、福音館書店）を読んだ子どもたちが草木染めをしていました。数年後縁あってインドネシアのイカット（オナツリ）を研究する先生の工房に通い、染色を習いました。

そこで、日本や世界各地の布に触れ、少しずつ模様の意味を知りました。贅（ぜい）をつくした布も美しいけれど、緋や刺し子に心惹かれました。丈夫な成長を願って子どもに付ける麻の葉模様や、「いつの世も一緒」という意味の沖繩「五四の緋」など、普通の母たちが作ったシンプルで美しい物たち。

工房では絵本の『ペレのあたらしいふく』（エルサ・ベスコフ／作・絵、小野寺百合子／訳、福音館書店）にある道具（百年前と同じ）を使って、毛を梳（す）くところから始めて、布を織りました。忙しい毎日の中にあつて、糸を扱う時間は心休まるときで

した。黙々と手を動かし続けることは、健やかに生きる力を取り戻すときだったのかもしれない。電化製品の無かった時代、必要に迫られて夜なべで手仕事をしたであろう母たちの苦勞も、今なら少しわかります。丹念な仕事が施された布には、家族の無事が祈られたばかりか、作るときには喜びもあつただろうと思ひ至りました。そして今ますます、その力強い美しさに胸を打たれます。

さて、私の現状は、家族が身に付ける物を一から作ることはできず、せめてと思つて繕い物をしていきます。ひざの穴を伏せ、アップリケをしたときの息子たちの喜びようといったら！ 繕い物をためておく箱を寒い天氣の悪い日に取り出すのは、私の楽しみでもあります。

かつて保育の仕事をしていた幼稚園では、子どもたちが自分の好きなことを見つけ、心ゆくまで遊ぶことを助け見守ることに心砕いていました。ひたす

ら泥だんごを作り続けたり、アリの行列を見つめたり、成長と共に数日・数週間にわたつてごっこ遊びをやりレー、こままわしなどが続いたりしました。

時を忘れて没頭すること、誰に言われたのでもなく自分のために練習を重ねること、役割を交代しながらささやかなことにも楽しみとやりがいを見つけていたこと、そんな中で仲間になつていったこと、その時どきを共に過ごせたのは私にとつても幸せなことでした。そしてプライベートでも、休みになると丸一日かけて山を歩き、自転車走らせ、染色をし、あのころは実に贅沢にたっぷり時間を使つていたものです。

長男が小学生になり、その忙しさに驚きました。息子はいつも頑張れと追いたてられ、緊張し、時間も細切れです。一人の力ではどうにもならないことも多く、私も気持ちが高なえることもたびたびです。そんなとき、緋布を思ひます。日々の暮らしを守り



イカミンチで、  
イカ団子鍋や  
イカ餃子はイカが？

### ～ イカを使った冬のレシピ ～

夏はイカツリ、寒くなるとイカをえさにしてはえ鍋漁と、舌岐には1年中イカがあります。イカは刺し身、湯引き、煮物、そして焼いても炒めても使いやすいですが、時には少し手を加えてこんな食べ方も楽しめます。

#### イカ団子鍋



##### 材 料 (4人前)

- イカ 1～2杯
- ヤマイモ 20～50g
- 好みの具  
(白菜、長ネギ、小松菜 など)
- 調味料 (塩・しょう油)

- ①イカは皮をむき、わたを出して細かく刻みたく。
- ②ヤマイモをすりおろして加え手でこね混ぜ、イカ団子を作る。まとまらなければ、小麦粉やご飯、パン粉などを加える。
- ③土鍋で好みの具をゆでてイカ団子を落とし、塩としょう油で味を整える。

#### イカ餃子

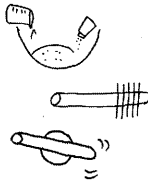


##### 材 料 (4人前)

- 地粉 (または小麦粉) 200g
- 水 100cc くらい
- イカ 1～2杯
- 好みの具  
(ニラ、長ネギ など)
- 調味料  
(塩少々・しょう油、ゴマ油)

##### ★餃子を皮から作る

- ①地粉に塩少々、水を加え、耳たぶの硬さにこねる。
  - ②ラップに包んで30分寝かせる。
  - ③軽くこねてから細長く伸ばして包丁で切っていく。これを羅棒で伸ばして広げる。
- ★イカミンチを具にして包む。



子どもたちが包むと、バッグ型やペンギン型など、びっくりするような餃子ができます。当たりはずれを作りたがって、中には皮の中はまた皮なんていうのを作ることもしつこいです。

支えながら、力強く美しい布を織り出してきた無名の母たち。一枚の布は、目の前にある仕事を一つひとつついでいねいにしていく先にありました。こつこつと飽かずあきらめずに続けること。生活することは、時間のかかることなのでした。

たつぷりの時間を過ごしてわかったことが、今の私の暮らしを支えています。それを息子たちにも伝えるために、「繕う」「歩く(送り迎え)」「炊事(手

をかけて食事を作る)」「語る」といったゆつくりの時間が、暮らしの中に散りばめられているのかもしれない。

息子たちには時を忘れるほどの何かを見つけ、心ゆくまで楽しんでほしいと願いつつ、私は私の目の前のことをこつこつとしていこうと思います。

＊この連載は、今回で終了いたします。  
(元幼稚園教諭 長崎県在住 二児の母)

上海⇔東京

## 子育てメール便(7)

橋本 雅子  
津守 多実

まさことたみは、東京の養護学校での仕事を通じて知り合った子育て仲間。まさこの子ども愛佳は、三歳女児。たみの子どもクナは、五歳男児。まさこ一家が夫、申屠（スンドウ）の出身地である中国上海に転居し、上海の暮らしがスタートしましたが、まさこの第二子妊娠がわかりました。つわりが始まり食欲が落ちる中、妊婦や子どもの食や出産について考える機会が増えました。

### 出産

#### — 育児方針の最初の選択

まさこ 上海では、経済力がある女性は、別料金で帝王切開での出産を選択することが主流のよう

す。日本の病院に似た診察や普通分娩を希望するなら、欧米大学・企業と提携した病院で、割増料金を払うVIP患者になる必要があります。駐在員家族はサポート会社と契約し、通訳を介して診察を受けているようです。帝王切開で出産した申屠の友人たちは、私が普通分娩したことを知り、怖くてできないと驚いていました。

愛佳のときには、自分にとって無理のない姿勢で生むことができ、夫がお産にかかわれる助産院を選びました。第二子も日常生活の延長線上でお産を迎えたい私の願いと、上海の産科事情のはざま

で、次第に日本での出産や、その



間の家族の生活について話し合うようになっています。

たみ 帝王切開は、医師の判断によつてすることという印象があつたので、上海の出産事情に驚きました。日本では、出産できる病院が減つてきている反面、都心部ではこだわりをもつて、出産院を選ぶ人が増えています。私も三十代後半でクナを出産したときには、体力に不安を感じ、ていねいに相談のつてもらえる産院を探しました。産後も、母乳育児か粉ミルクか、離乳食をどうするか、予防接種の相談など、子ども医療と食育への考え方にも出産院が関係してきます。どのような出産をする

か考えることは、「親」として子育てにかかわる最初の選択だと思います。

### 味覚の調和

#### — 家族の団らん

まさこ 今回の季節、朝から湿度の高い熱気が地面から上がるせいか、今まで気にならなかつたさまざまなにおいにもせ、気分が悪くなります。つわりの母親に愛佳もつられて食欲がなくなり、二人でご飯と梅干、冷奴、という日もあり、家族に心配をかけています。上海に来てしばらくは、緊張や目新しさがあつたのが、愛佳は祖母の料理をよく食べ、みんなで喜

んでいました。ですが、日本の幼児向け献立に慣れた舌には、なじむのに時間がかかる味が多かつたようです。日本の食は多国籍といわれますが、こちらの家庭では中華料理がほとんどで、食養生を考へて献立をたてます。妊婦用にと、むくみによい冬瓜や、滋養のある鶏肉と漢方のきのこのスープをはじめ、郷土料理の干し魚や貝の漬物、豚角煮、河海老や野菜の炒め煮、河魚の酒蒸なども食卓の定番です。日に日に愛佳の表情が暗くなり、食べたがらなくなりました。かといって、食べ慣れた和洋食を作っても、いつもの味と違つと言つてはしが進みません。



空気や水のおいが違い、肉も魚も臭みがあり、野菜の品種が違い、日本製の調味料で同じように調理しても、幼児の鋭敏な感覚には別の料理に感じられるのでしょう。むしろ手を加えていない、果物や生のキウウリやトマトばかりを好んで食べます。よい方法はなにかと、家族で幼児の日常食について話し合う毎日です。

たみ 母親の体調不良の寂しさに、食文化の違いが際立ち、家族みんなで考えなければならぬ状況だと察します。

祖母母の家で、クナの好きな物を作ってあげてと言われたことがあります。同じ物を同じように調理してもクナはまったく食べなかったことを思い出しました。祖母はハムとパン、祖父は干物、私たちは納豆、子ども用にホウレンソウ炒めや卵料理、あまりにも品数が多すぎて雑然とした食卓で、クナは沈み込んでいました。こういう物をおいしいと感じてほしいという親の願いが家庭の食卓には表れます。みんながその価

値観を共有して食卓を囲んだ団らんが生まれ、味覚も育ってくるのではないかと思っています。

### 食の安全意識

たみ 食品の安全性に関する事柄に注目が集まっています。上海では、食の安全について、子どもの口に入る物について、どのような意識がありますか？

まさこ できるだけ産地のわかる新鮮な食材や有機食品を探し、加工食品を選ばず、私も祖母も手作りしています。飲用はミネラルウォーターです。祖母の習慣で食器も熱湯消毒し、野菜も湯冷ましや浄水で洗って仕上げ、生水のま

まででは使いません。自家栽培の野菜を「無農薬だから安心だ」と話す、祖父と園芸仲間の会話を聞く、上海でも食の安全への意識が高まっているのを感じます。

**たみ** 食器洗いに時間がかかると以前のメールにありましたが、川魚を常食する地域ならではの、昔からの自衛手段に思えます。さらに農薬などの不安も加わり、見えないところで手をかけなければいけないのですね。

日本では、普通のスーパーでも自然食品店のような食材が手に入り、生鮮食品には産地が明記されるようになりました。子育て中の母親たちは生協を利用し、浄水器

を使い、加工食品、冷凍食品は避けるのが当たり前になってきています。にもかかわらず、コンビニの菓子などは、素性をはっきりしなくとも子どもに与える傾向があり、矛盾を感じます。

### 外食・買い食い

**たみ** 都心の幼稚園に子どもを通わせるようになり、外で作られた物が子どもへの口に入る機会が増えたと実感しています。クナの幼稚園では、栄養士の先生と一緒に手料理を作る機会があり、栄養、安全、食文化についてみんなが意識しています。

それでも、よほど気をつけてい

ないと子どもの味覚は濃い味の外の物に慣れ、家庭から離れていってしまいます。午前帰りの日に、お弁当を持って持っていても食べる場はなく、ほかの子と一緒に食べたいという思いからハンバーガーの味を覚え、おやつ時の公園では、クナは買った菓子を交換するのを楽しみにしています。

昔ながらの屋台食文化が残っているという上海の状況を伺います。が、粥や果物は、間食として栄養を補うことにも、また潤いにもなることだと思えますが、いかがでしょうか。

**まさこ** 外食や買い食いは人々の生活に密着しています。市場でも

早朝から点心店に人が集まり、登校中の小中学生は、親と腕を組んでパンを食べ、自転車の後部座席でマントウ（中国の伝統的な蒸しパンの一種）をかじっています。ある幼稚園の外には、夕方にソーセイシや腐豆腐を揚げる自転車屋台が止まり、園帰りの親子がごく当たり前に道端に腰を下ろし食べいています。別の幼稚園では、甘い菓子を避けるように教え、間食は中華粥や果物です。大人が園庭で食べさせる物も、乳製品や果物や水など、園の指導を意識したものに思えます。昔からの食習慣のどこかさと、栄養学的な食事指導の緊張感が混交しているようです。

### かわわりが育てる食文化

まさこ 公園や幼稚園では、大人は遊ぶ子どもを追いかけて、ひと口サイズの果物を、口の中に入れる姿をよく見ます。知人宅へ行けば菓子や果物がふんだんに用意され、子どもたちは思う存分に食べます。断ると愛佳に口を開けさせ、口の中に入れられます。親以外の大人も育児にかかわることが当然と思う社会の感覚、また、親と子で別の人間関係があることを意識させられました。

レストランによっては、テーブル担当の給仕が子どももの口元に付いた食べ物を白いナフキンで拭き

にきます。愛佳のように警戒して拒むことが珍しいのか、給仕には苦笑されます。手取り足取り世話をするのがよりよいサービストということ、家族総出で育児にかかわり、一人きりの孫、子どもを大事に育てる世相を反映しているようで、印象的でした。

**たみ** 幼児が食べるためには、大人の手やかかわりが必要であり、そこにはかかわる大人の考えも反映され、子どもは口から、栄養だけではない大人の思いや習慣も取り入れることになるのですね。

飲食を介した大人と子どものやりとりは、昔と今とずいぶん変化しています。私が幼かったころに

は「あーん」といって口に入れてもらった記憶がありますが、現代では、保護者以外が幼児の口に食べ物を入れる光景は見かけません。道でアメをくれようとするおばあさんが、「あげてもいいかしら」とこちらの顔を気にするころともあります。

親の了解がなければ食べない日本の子どもの食事情も、子どもの育ちに影響を与えているかもしれません。

子どもの食は、家庭の考えのもとで育まれるものですが、食を共にすることで開かれる味覚、味覚から広がつてくる人とかかわりを閉ざしたくはないと思います。

まさこ 親には各々の国、地域、家庭の文化、社会的背景があり、さらに子どもの好みや体質を尊重して、新しい家族の味がつくられていくですね。

未知の食べ物魅力的であると共に、時には、初めて口に入れる怖さも伴います。おいしそうに食べる人とかかわりがあつて、口に運ぶ勇氣もわきます。自分の体に取り入れ、消化して血となり肉となる一番原始的な営みを通して、内側からも新しい世界が知覚され、自分のものになっていくのでしよう。

今回、母子で食欲が減退したことをきっかけにして、日々の食

が、言葉以上に異文化に直面する突端でもあり、異文化を取り入れ交じり合う機会とえています。

住む場所が変わり、周囲の様子や働きかけに影響を受けながら、また、成長する子どもの変化と、親として選択すべき数々の事柄に戸惑いながらも、わが家の味ができていくプロセスは、家族で大事にしたい原点を確かめる道筋のようです。

津守（愛育養護学校、造形アート

遊びの提案・研究をしている）

橋本（元愛育養護学校、現在は母親

としてクリエイティブ保育を志す）

\*この連載は、今回で終了いたします。

## 赤ちゃん返り

長田 瑞恵

### 娘の直感

私の第二子妊娠が明らかになったのは、娘が一歳九か月のころでした。新しい命を授かり、私も夫も大変喜びましたが、その反面、つい慎重にならざるを得ませんでした。というのも、娘のときには妊娠の最初期から切迫流産になってしまった経験があっ

たためです。そこで、落ち着くまでは周囲に妊娠の報告をせず、用心して過ごすことにしました。

当初は、娘にも私の妊娠のことは伝えませんでした。たとえ話をして聞かせたとしても、当時の娘にはまだきちんと理解できなかったと思います。ただ、そのころから、家庭での娘の様子が少しおかしいように感じていました。何となく機嫌が悪く、父

母にべったりとくっついて離れないことが増えたように思えました。しかし、多少の用心をしながら過ごしていたとはいえ、私の娘への接し方が激変したわけでもありませんでしたので、私の思い過ごしかもしれないとも思っていました。

そんなある日、娘を保育園に送っていった夫が、保育園の先生から声をかけられました。

「最近、お母さん、お忙しいのかしら」

どうも娘の様子がおかしいと感じていたのは、私の思い過ごしではなかったようでした。娘の変化は家庭だけでなく、保育園でも表れていたようでした。保育園でも娘はよく泣き、先生方にしがみついて離れないことが増えていたそうです。私は覚悟を決め、保育園の先生方に妊娠の報告をしました。先生方はすぐに合点がいったようでした。

それにしても、娘の鋭さには驚きました。第二子を妊娠した人の体験談として、誰よりも早く母親の

妊娠に気がついたのが上の子どもであったというような話をよく聞きますが、自分の娘もまた、そのような直感をもっていたのには驚きでした。言葉がたなく知識も少ない分、子どもには特別な感受性が備わっているようです。

そしてまた、娘の変化に敏感に気づいてくださった保育園の先生方にも脱帽し、娘を温かく見守ってくださいることに改めて感謝したのでした。

### 娘の赤ちゃん

保育園の先生方に妊娠の報告をしたころから、私は折に触れ、娘にも新しい命の存在を話して聞かせるようにしました。

「お母さんのおなかの中には、赤ちゃんがいるのよ。いいこいいこ、してあげてね」

保育園には娘より小さい赤ちゃんもいます。そのため、もともと娘は赤ちゃんが大好きで、保育園で

は赤ちゃんの簡単な世話をさせてもらっているようでした。

私の妊娠が進んでおなかが目立ち始めると、娘は「赤ちゃん」という存在にさらに強い興味をもつようになっけていきました。そして、不思議なことに、娘は自分のおなかの中にも赤ちゃんがいると主張しだしたのです。

たとえば、娘が二歳一か月のころのことです。朝食中に娘が自分のおなかを指さして「赤ちゃん」と言うので、私が「S（娘の名前）のおなかにも赤ちゃんがいるの？」と尋ねると、娘はにっこりしながらうなずくのです。そして、朝食のおかずのウイナーを手に取り、自分のおなかに置くまねをしながら、再度、「赤ちゃん」と言いました。そこで私が「そう、赤ちゃんにも食べさせてあげるの」と言うとうと、娘はまたうなずきました。私が続けて、「じゃあ、たくさん食べなきゃね。たくさん食べて

赤ちゃんにも届くようにね」と言うとうと、娘は納得したようにウイナーを食べながら「赤ちゃん、おいしいってー」と満足気に朝食を済ませたのでした。

もっと傑作だったのは、父親のおなかの中にも赤ちゃんがいると娘が主張したことでした。「お母さんのおなかの中には赤ちゃんがいるのよ」と語りかけると、うなずきながら「Sも」と言います。

そこで試しに「じゃあ、お父さんには？」と尋ねてみると、しばらく考えた後で「うん」と言うのです。何度尋ねても、かなりまじめな顔をして「お父ちゃん、赤ちゃん、いる」と答えます。自分自身と母親とを重ね合わせ、さらにそこに父親も結びつけて考えることで、娘なりにまだ見ぬ「赤ちゃん」について考え、理解しようとしていたのだと思います。

### 揺れる気持ち

私の妊娠中、娘の赤ちゃん返りは強くなつては少



し収まり、また思い出したように表れるという具合に、まるで揺れる振り子のようでした。私は意識して、娘が甘えたいときにはできるだけ受け入れられるように心がけていました。しかし、切迫流早産を避けるために、娘を抱きかかえて歩き回ったり、娘と一緒に体を使って遊んだりということが難しくなっていました。娘は寂しい思いをしていたのかもしれませんが。

この時期の娘との関係の中で難しかったのは、娘の中に赤ちゃん返りと反抗期とが共存していることでした。娘は時には私にべったりと甘えてくる一方で、何でも「自分でやりたい」「人の言うとおりにほしたくない」という気持ちが強くなってきていました。そのため、甘えたい気持ちと反発したい気持ちが娘の中でもごちゃ混ぜになってしまうのです。娘自身も何がしたいのかわからなくなってしまう、最後には収拾がつかなくなるほど大泣きになっ

てしまうこともしばしばありました。そうかと思えば、反発したい気持ちに甘えたい気持ちがプラスされて、私が叱るようなことをわざと連発して、私の気をひこうとしているような様子も見えました。

### 新しい家族

娘は「母親のおなかの中に赤ちゃんがいる」ということは理解しているようでしたが、「おなかの中の赤ちゃんが、やがて家族としてわが家に加わる」ということは、あまりよく理解できていないようでした。そこで、臨月に入ったある日、私は改めて娘に語りかけました。

「もうすぐ、ちっちゃい赤ちゃんがSのおうちに来るのよ」

すると、娘はうれしそうに「ちっちゃい赤ちゃん、おうちに来るのねー」と繰り返し話すようになりました。「母親のおなかの中にいる赤ちゃん」と

「おうちに来る赤ちゃん」とが同じであるというこ  
とをきちんと理解できたかどうかはわかりませ  
んが、それでも、新しい家族が加わることを娘が  
楽しみにしている様子が伝わってきました。

そして娘にこの話をした二日後、娘が二歳四か  
月のとき、予定日よりかなり早いにもかかわら  
ず、充分に大きく育った男の子が生まれました。

息子が誕生した日の夜、娘は産院の新生児室の  
ガラス越しに、大きな声で「日（息子の名前）くん！  
日くん！」と弟のことを呼んでいました。初めて  
見る赤くしわだらけの赤ちゃんや、喜びに包まれた  
父の様子に、娘も「何か重大なことが起きた」とい  
うことを感じているようでした。

息子が退院した日から、娘は早速お姉ちゃんぶ  
りを発揮しました。暇さえあれば眠っている弟のそ  
ばへ行き、その手をそっと握って寄り添っています。

息子の世話をする父母の様子は、目を皿にして見



めています。オムツを替えていけば新しいオムツを  
持ってきてくれたり、寝かしつけるときには布団を  
掛けてくれたりするなど、実にかいがいしく弟の世  
話をします。また、ままごとの中でも、息子の世話  
をする私のしぐさをおかしくなるほど完璧にまねて  
遊んでいます。

しかし、その一方で、息子の誕生後、娘の赤ちゃ  
ん返りはさらに強くなりました。妊娠中に私が充分  
に抱いてあげられなかったこともあるのでしょ

が、私にしきりに甘えるようになりました。保育園から帰宅すると私の元へ走り寄ってきて、「抱っこー」としがみつきます。また、息子に授乳しているとそばに寄ってきて、「Sもおっぱい飲みたい……」と恥ずかしそうに言うこともあります。

きょうだいが生まれるということは、単に家族に新しい関係が加わるということだけでなく、既に存在していた娘と私との関係まで見直しと再構築を迫られます。それは、大人の私にとっても決して易しいことではありません。まして幼い娘にとっては、それこそ、天地がひっくり返るほどの一大事なのでしよう。娘は「赤ちゃん返り」という形で私との関係の再調整を図っているのです。

私はできる限り娘の甘えに応じ、娘の声に耳を傾けたいと思います。もちろん、息子の世話を優先させなければならぬことも多く、その場合には父親である夫にできるだけ娘とかかわるよう協力しても

らいます。きょうだいが生まれ、時には我慢が必要になったとしても、娘もまた息子と同じように両親から大切にされているということを、娘に伝えたいと思うのです。娘の心の成長のためには、大切にされ受容された経験を重ねることが必要ですし、それは、いずれ他者に優しく接し他者を受け入れるためにも重要なことだと思っております。

今日も、息子に授乳する私の横で、娘は赤ちゃん人形のオムツを替え、そして控えめに「Sもおっぱい飲みたい……」とつぶやきました。娘の赤ちゃん返りがいつまで続くのか今はよくわかりませんが、いつか娘が自然に「赤ちゃん」から「お姉ちゃん」に成長するまで、ゆっくり娘と向かい合っていくしたいと思います。

(十文字学園女子大学 専門は認知発達)

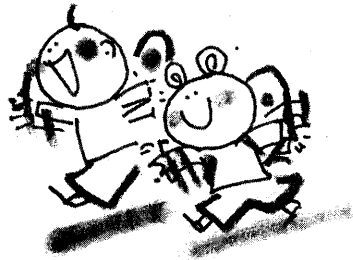
※主な著書「知識獲得過程についての理解の発達」

風間書房 二〇〇三年

## 保育の現場から

# 心弾む日々を重ねて

阿蘇亜希



## 三歳児の世界

「おぼけが出たー!」

遊戯室にある大きな扉の向こうのうわさを聞きつけて、子どもたちは自分のお道具箱をのぞき「これだ!」と思うお面を選んでかぶると、たちまち勇敢な顔つきになって勢いよく保育室を飛び出していきます。広告の紙やブロックで作った武器、魔法のステッキを手にして向かう子どももいて「この武器は

ここから雷が出るんだ!」「私は魔法でやっつける!」と意気込んでいます。遊戯室に向かう途中、私の変身したお面では太刀打ちできないと思うのか「先生! ぼくのウルトラマン強いから、これかぶって!」と、自分のお面を貸してくれる子どもが、よく考え、心を動かして遊んでいることに私自身が気づかされ、驚くこともたびたびです。

新幹線になって園内のあちらこちらに連れて行く

てくれたり、チョウチョの羽を付けておいしい蜜を  
探しに出かけたり、消防士になってホースを手に出  
動したりと、好きなものに変身すると子どもたちは  
活き活きと表現し始めるのを感じます。また一つの  
ブロックが食べ物にも薬にもカメラにもなったり、  
壁に絵を貼りテレビに見立ててじっと観ていたり、  
三歳児の思いもよらない発想のおもしろさに感動  
し、自由自在な遊びの世界に心弾ませる毎日です。  
そうして子どもたちの思いを受け、私も共に楽しみ  
ながらも、真剣に遊ぶ日々を送っています。

### 遊びが発表会に

三学期が始まり、この冬の厳しい寒さの中、なぜ  
か子どもたちはカップの水（実際は空っぽです）に  
お好みのシロップをかけてくれるかき氷屋さんを保  
育室で繰り返し楽しんでいました。

そんなある日、うれしいタイミングで雪が降り、

子どもたちは「待っていました」とばかりに大喜びで  
テラスでかき氷屋さんを始めました。真っ白な雪を  
配達したり、さまざまな味を開発したり、友達と合  
体させて山盛りかき氷を作ったり、思いがけず降っ  
た雪という自然の恵みで楽しさは大きく広がしまし  
た。それからというもの、雪は溶けても探検に出か  
けると「あ！ ここにはしょっぱい水がある！」  
「しぶい水もあるよ！」「砂味もあるぞ！」と、さま  
ざまな水を見つけることを楽しみました。

すると、いつしかなかなか見つからない「ひみつ  
の水」を探して探検するようになっていきました。  
ある子は「甘いんだよ」と話し、ある子は「キラキ  
ラしているんだよ」と言う、それぞれのイメージが  
こうして遊んでいるうちに少しずつみんなの共通の  
イメージになっていきます。そうして子どもたちの  
遊びの中で繰り返し広げられる思いを拾っていくうち  
に、こんな日常の姿を「のぞみっこ発表会」という

生活発表会のステージで表現できたら、と思うようになりました。

### ペンギンさんからの手紙！

そんなある日、子どもたちのもとに手紙が届きました。手紙には「ぼくは冷たい氷が大好きさ！」とあり、手紙の主は「かき氷屋さんをしたり、氷を探している君たちだけにいいことを教えてあげる」というのです。みんなで秘密を共有するようにヒソヒソ声で読み続けます。それは「遠くのある所に甘くてキラツとしたひみつの氷があるよ」というものでした。初めはポカンと不思議そうに聞いていた子どもたちも、次第に何が起きているのがわかってきたのか、一人が「えー！ 誰なのー!？」と言うと、周りの子どもからも口々に「ペンギンさんからじゃなーい!?」という声があがりました。子どもたちの言うペンギンさんとは、先日読んだ『やまからきた

ペンギン』（佐々木マキ／作・絵、フレーベル館）という絵本の中に出てくる、かき氷が好きなペンギンのことでした。その日から、毎日子どもたちのもとに手紙が届くようになりました。

みんなで探検のときに使っていたものによく似た、海やおぼけ線路が描いてある地図が届いた日には、子どもたちは地図とにらめっこしながら「この海を通って行けばいいんだね!」「この温泉でひと休みしようよ!」と会話も弾んでいました。また「海を渡るなら泳げた方がいいよね!」「ぼくは早く行ける新幹線になる!」と何に変身していくか自然と思いが膨らんでいる子どもたちでした。そんな子どもたちと思いをめぐらせていると私自身もわくわくし、一緒になってその世界へ引き込まれていきます。

このペンギンさんからの手紙は、さらに遊びの楽しさが深まり、みんなで少しでもイメージが共有できたら、という思いで、悩みつつも私がペンギンに

なりきって書いたものでした。どんな表情でどんな反応が返ってくるのだらうと、一人ひとりの姿を思い描きながら書くことは私にとっても楽しいことでした。また翌日には、子どもたちと届いた地図を持ってお帰りの前に探検に出かけることにしました。自然と足取りがそつとそつと……になっていくことに、みんなでドキドキする気持ちを共有しているのを私自身も感じました。

## いざ出発!!

こうして、ペンギンさんからの手紙でさらに広がった生活を楽しみながら、発表会当日はやってきました。

遊んでいた世界から自然に入り込めるように、海を渡りペンギンさんに会いに行くことにしました。思い思いのお面を付けた子どもたちですが、たくさんの方のまなざしを受ける初めてのステージでは、

それぞれにさまざまな反応がありました。思いきりステージを駆け抜ける新幹線のA君や、ガタンゴトンと手で車輪を表現してやってくるSLのB君や、這いつくばってのっそり出てきたクワガタのC君のように普段通りになりきって表現する子もいれば、戸惑いの表情で、友達の手をぎゅっと握ってきたDちゃんや、恥ずかしさを紛らわそうと友達にちょっかいを出しながらステージに立つE君など、一人ひとりの気持ちが手に取るように伝わってきました。それでも、友達と一緒にいうことに少しづつ安心感を覚え、次第に自分らしく表現するようになっていく様子も垣間見られます。

海を渡る場面では、これまで初めてのことに一歩を踏み出すことが難しかったFちゃんが先頭になり、四つんばいになって海をどんどん泳ぎだしました。それに続いて、大きなアクションで高く飛んで渡るヒーローや、橋があると見立ててぴゅーっとス

ビードを上げて渡りきる新幹線や、羽を広げて飛んで渡るクワガタなど、それぞれの表現が自然に出て徐々に光っていきます。そして、最後に訪れた温泉では、みんながステージにしっかりお尻を着いて肩まで浸かっている中、「ぼくは電車だから温泉には入れないんだ」というG君は後方で立っっていて、こんな場面からもこだわりをもってなりきっていることが感じられました。そんな一人ひとりの思いを感じながら、いよいよクライマックスです。

ここからは当日のみのお楽しみで、子どもたちは何が起こるか知りません。みんなで声を合わせて「ペンギンさん」と遠くへ呼びかけます。子どもたちの声が遊戯室いっぱいに響き渡ると、空の向こうにぼんやりとペンギンの姿が現れてきました。これは保育者がいろいろと考えた末、スライドで壁にペンギンの姿を映し出して登場させました。その間、時間が止まったように言葉もなく遠くを眺め続ける子



▲「ペンギンさん！」発表会にて

どもたち。そして空の向こうに吸い込まれるようにゆっくりと消えていくころ、子どもたちは再び「ペンギンさん！」と叫び大きく手を振ったのでした。



## 広がっていく生活

その後、ペンギンさんから手紙とひみつの水を受け取って幕は閉じました。発表会が終わり保育室に戻った子どもたちは口々に「ぼくはりんご味!」「ドーナツ味!」「カルピス味だよ。食べる!」「私のはぞみ幼稚園味! からいよ」と報告をしてくれました。

翌日には、ペンギンさんに手紙を書いてきたH君や「昨日ペンギンさんがかき氷食べる夢を見たの」というIちゃんもいて、それぞれの世界でなお思いが膨らんでいることが伝わってきました。遊びの中でもペンギンさんの家を探しにいく探検や、ペンギンのお家ごっこも始まり、海の水を砕いてかき氷を作って食べたり、また温泉は、子どもたちのアイデアでお家やプールや電車へとどんどん変化していました。

発表会という一日は終わりましたが、子どもたちの中では遊びの世界は途切れることなくずっとながっているのです。発表会が終わっても、時折、空を見上げて「ペンギンさん!」と呼びかけ、遠くの空を眺めている子どもたちの姿からもそのことは伝わってきました。発表会は当日のためや見せるためではなく、遊びの流れの中の一コマとなり、その前後の生活がつながっていくことを大切にしたいと思えます。さらに子どもたちが心弾む日常を積み重ねることに意味を見いだしていきたいです。一人ひとりがさまざまな思いを抱えている子どもたちが、みんなで「ぎゅっ」と一つになる瞬間を味わえたとしたらうれしいことです。三歳児の今、一人ひとりがイメージを広げ、伸びやかに自分を表現し、いろいろな感情をたっぷり味わう経験を重ねてほしいと改めて感じました。

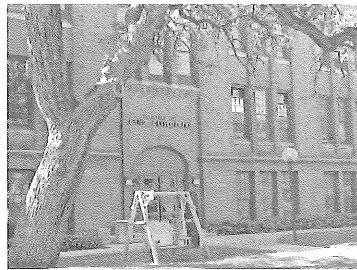
(埼玉県 浦和のぞみ幼稚園)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(26)〉

## アメリカ合衆国の 保育事情・保育思想 (1)

— ミネソタ大学内にある保育の場 —

塩崎美穂



▲写真1：ミネソタ大学の子ども発達研究所

二〇〇七年九月、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）屈指の総合大学として名高いミネソタ大学を訪れました。雄大なミシシッピ川をはさんで広がっている緑あふれるキャンパスには、医学、法学、教養、生物、農・食物など、十五以上の学部 (college) や研究所 (institute) が建ち並んでいます。

### ミネソタ大学のラボ・スクール

ミネソタ大学キャンパスにある教育人間発達学部

(College of Education & Human Development) の子ども発達研究所 (Institute of Child Development) には、附属のラボ・ナーサリースクール (The Shirley G. Moore Laboratory Nursery School / 現場の先生たちが「Lab School」と呼んでいた) の以下ラボ・スクール) があり、一九二五年の開設以来、アメリカの保育者養成と子ども研究 (Child Study) の中心的役割を果たしてきました。

現在ラボ・スクールでは、二つの保育室で、次のよ

うな四つのクラスが運営されています。

- 一、週二日（火・金）午前、二〜二・五歳クラス  
（グループサイズ十四人）
- 二、週三日（月・水・金）午前、二・六〜三歳クラス  
（グループサイズ十四人）
- 三、週五日午前、三〜五歳クラス（グループサイズ  
十八〜二十人）
- 四、週三日（月・水・木）午後、三〜五歳クラス  
（グループサイズ十八〜二十人）

保育時間は午前クラスが八時半から十一時半、午後クラスが十二時半から三時半です。

ラボ・スクールのスタッフは、管理職も含め全員で八〜九人でしたが、同じ保育時間内には多くても二クラスだけの保育であり、子どものグループサイズへの配慮もあるため、あわただしいことはありません。し

かも、二歳クラスに関しては、親と保育者 (teacher) 双方が、子どもが一人でいても大丈夫だと判断するまで、親が保育室に残ることを求めていますし、常に保育実習生 (student teacher) も保育の場にいる状況です。保育者の対子ども人数としては、日本よりはるかに恵まれた保育環境といえます。

しかも、  
ラボ・スクールの園庭には、リスが走りまわる高くて大きな木々や、手押しポンプで水流の楽しめる、  
「Frog and



▲写真2：がまくんとかえるくんの流れ

Toad's Stream (がまくんとかえるくんの流れ)の沢、また、長い冬の間は雪のそりすべり場になるという芝生の坂などがありました。私は、初秋の園庭をラボ・スクールの教育専門 (Education Specialist) であるアン・カールソンさんと歩きながら、お茶の水女子大学附属幼稚園の「お庭」や「お山」を思い出ししました。子どもが自分から外に出ていきたくなる「自然」が、保育者の保育を楽しむ視点に支えられ守られている様子に、同じような保育の場の雰囲気を感じたのかもしれません。

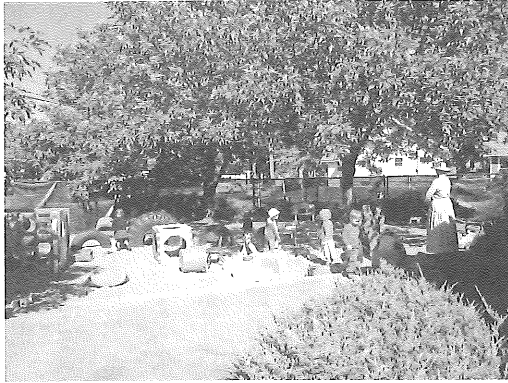
授業料は年間二千ドルから四千五百ドル (日本円で二十万から五十万円程度) とやや高めで、保育時間の短さも合わせて考えると、ラボ・スクールは中・上階層の家庭を中心に利用されているものと考えられました。実際、私が訪問したときには、アフリカ系の父親が一歳前後の息子さんを連れて見学に来ていましたが、すらすらとして身なりのよい彼がフランス語まじり

の英語で話すと、フランス語を披露したい子連れの母親たちも集まってきたて、おしゃべりの輪が広がっていました。アメリカ人が外国語 (しかもフランス語) をしゃべり、他地域の子育て文化に興味を示す場に居合わせた私は、正直、「ここはかなり意識が高い感じだな」と思いました。

もちろん、こうした子育てのネットワークがあることはとても重要です。多人種多民族国家アメリカでは、必要不可欠な人と人とのつながりでしょう。ただ、こうした人の輪を「さすがアメリカだな」と思う反面、貧困層の困難を含むアメリカ社会における保育実践や保育研究に、このラボ・スクールがどのような役割を果たしているのか見え難い、という感じもまたぬぐいきれませんでした。

### ミネソタ大学のチャイルドセンター

ミネソタ大学キャンパス内には、さきほどのラボ・



▲写真3：チャイルドセンターの園庭あそび

スクールと同じ教育人間発達学部に属するミネソタ大学チャイルドケアセンター (University of Minnesota Child Care Center / 以下チャイルドセンター) があります。このチャイルドセンターは、大学の教員、職員、学生など大学関係者のための保育の場(いわゆる職場保育所)として一九七四年に開設されました。

私が訪問したとき、ちょうど、産後間もない産休中のチャイルドセンターの保育者が、産まれたばかりのわが子連れれて

チャイルドセンターに立ち寄っていました。教育コーディネーター (Education Coordinator) のシェリリン・ゴルドスミスさんは、私を案内しながら、「私も(この赤ちゃんに)初めて会うのよ」とうれしそうに、小さな赤ちゃんを抱っこしていました。

保育者が、わが子連れれて行きたくなる職場であることの意味は、けっして小さくないでしょう。お母さんになった若い保育者が、シェリリンさんほか年配のスタッフを頼り、チャイルドセンターを自分の生きる生活の舞台にしていることが伝わってきました。保育学生、新米の保育者などの若手保育者には、子どもたちが日々育つていく保育の場でこそ学べる何かがあることを、私たちは長く語り合いました。保育・幼児教育課程の学生だけでなく、さまざまな学部の学生を実習生 (student practitioner) として受け入れ、スタッフの一員にしていくチャイルドセンターでは、その学生の専攻が文化人類学であれ生物学であれ、子どもと

共にあることを楽しむ人であれば、保育を共につくっていくことができる、ということでした。

チャイルドセンターには、現在乳児期十八人 (infant / 三〜十六か月)、よちよち歩き期五十四人 (toddler / 十六〜三十三か月)、幼児期六十八人 (preschool / 三十三か月〜就学前) の三つのグループがあり、全体で一四〇人の子どもがいます。開園時間は朝七時半から夕方六時まで。入園希望者の待ちリストはとても長く、いつもチャイルドセンターに入りたい人の数が入園可能人数を上回っています。この「待機児」の待ち期間は、平均して一年半にもなっていました、とのことでした。

保育料は世帯所得が考慮される傾斜料金 (sliding fee) がとられ、高所得世帯 (High)、ミドル所得世帯 (Middle)、低所得世帯 (Reduced) の三段階になっています。たとえば、終日保育 (full time) の場合、高所得世帯で一か月乳児は千二百六十ドル (約十三万

円)、幼児は千二十ドル (約十万円) の保育料です。

これが低所得世帯ならば、乳児九百八十ドル (約十万円)、幼児七百七十六ドル (約七万五千円) となります。全保育運営費の八割を親の保育料で賄うため、日本に比べて、アメリカの保育料はかなり高めです。それでもなお、このチャイルドセンターでは、日本の保育所やヨーロッパの保育制度に見られる「応能負担」、つまり世帯所得に応じた傾斜をつけた保育料徴収の仕組みが採られています。これは、アメリカの保育制度から見れば特異なことといえるかもしれません。

というのも、ご存知のようにアメリカの保育制度は玉石混交、多元性をその特徴としています。なぜなら児童福祉法などを根拠にした全ての子どもに対する国による保育の保障が、制度的には整えられてこなかったからです。自助努力を社会福祉の基本にする政策の中、保育制度もその例外ではなく、自分で子どもを育

てられないと判断される場合（低所得、障碍などの  
ニーデイ(Needy)）にのみ、公的な保育の保障は適応  
されてきました。ですから、ニーデイとは判断されな  
いごく一般的な子どもの場合、アメリカの保育料は保  
育を利用する人がその益に対して同一の料金を負担す  
る「応益負担」原則が貫かれてきました。先に見たよ  
うに、ラボ・スクールもその原則にのっとっていまし  
た。でもチャイルドセンターでは「応能負担」がとら  
れている、ということです。

### キャンパスにある二つの保育の場

このように、ミネソタ大学内には、歴史や役割の異  
なる二つの保育の場があります。これは、お茶の水女  
子大学（以下、お茶大）に現在ある、附属幼稚園と附  
属ナーサリーによく似た保育の場だと考えられます。  
つまり、一方には、大学研究者との共同研究の蓄積  
をもち、国の保育実践研究の拠点として期待されてき

た歴史のあるラボ・スクールと附属幼稚園があり、も  
う一方には、生活者としての大学人（大学内で働いた  
り学んだりする人）を支える仕組みとして保育の場が  
拓かれ、大学の研究や保育者養成とのつながりをつ  
くってきたチャイルドセンターと附属ナーサリーがあ  
ります。

総合大学  
という自治  
組織の場  
で、二つの  
保育の場が  
それぞれの  
大学で生成  
しているこ  
とは、保育  
思想の文脈  
から考えて



▲写真4：2歳児クラスの保育室の様子

も、保育制度として考えてみても、興味深いことではないかと改めて考えさせられました。大学という、ある意味特殊な生活空間でさえも保育の場が二通り用意されること、また、社会福祉制度の国家的枠組みが異なる中でもよく似た二つの保育の場が生成していること、この、「二つある」ということの意味は、簡単に「三元化」とくくってしまえば済むようなことではなく、保育研究の大事なテーマだと思います。

### ミネソタ大とお茶大のつながり

第二次世界大戦中に兵役を経験し、戦後、お茶の水女子大学(以下、お茶大)の講師となった津守眞氏が、終戦から間もない一九五一年から一九五三年にアメリカのミネソタ大学へ留学し保育・幼児教育を学んだことは、本誌上でたびたび報告されてきました<sup>1</sup>。津守氏の留学先がミネソタ大学であったことと、今回の私の訪問先がミネソタであったことはまったくの偶然なの

ですが(今回の私の渡米目的は中等教育段階の市民教育実践を調査することでした)、ミネソタ大学へ行き、二つの保育の場を訪問して考えたことの多くは、津守氏がミネソタ大留学の後に、お茶大で行った保育実践や保育研究の意味や、そうした日本の保育の実践や研究とのつながりの中に見えてくるアメリカの保育・教育思想の変遷でした。

とりわけ、保育・幼児教育の場を「子ども遊ぶ場」とする思想の変遷については、倉橋惣三以来の本誌の変遷にもかかわる大事な考察点だと思われれます。

『「幼児の教育」誌、つまり本誌は、…(中略)…軍部の批判の対象となることはなかった。このようなことから、戦後になって、倉橋の戦時中の言動が批判されたことがあった。…(中略)…倉橋には、守らねばならないものがあった。フレイベルが説き、米国の進歩主義教育が主張したこと、幼稚園を幼児の遊ぶ場と



するためには、あらゆることに辛抱を重ねなければならぬ、ある点では周囲と妥協せねばならないという倉橋の決意によるものだったと私は思っている。倉橋は遊びを中心とする幼児の生活の流れを東京女高師付属幼稚園で守り通した。そのために…(中略)…米  
国教育使節団は、小学校以上の教育には厳しい批判をしたにも拘わらず、女高師付属幼稚園を訪れたときにはきわめて好意的な観察をし、「日本の幼稚園は米国のそれとあまり違いはありません」(『幼児の教育』第四十五巻第二号、日本幼稚園協会、一九四六年十二月)と報告している。」

お茶大とミネソタ大の保育思想のつながり、そして子どもの遊ぶ姿の中にこそ保育研究があることを主張し続けてきた津守氏のこのような言明については、継続して考えていきたいと思っています。

(お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師)

\*本研究は、平成十八〜二〇年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「グローバル化・ポスト産業化社会における教育社会学の理論的基盤の再構築に関する研究」(研究代表者・広田照幸、課題番号・一八八三〇一七六)による研究成果の一部である。

#### 註

1. 一九五二年六月から一九五三年八月の間に書かれた「アメリカ通信」では、ミネソタ大学のゼミヤアメリカの生活の様子が海を越えて報告されていた。近年では、『幼児の教育』第九十八巻第十一号(一九九九年十二月)、「第一〇〇巻第十二号(二〇〇一年十二月)までの連載「私が幼児教育を志した頃」に詳しく述べられている。

2. 津守真「私が幼児教育を志した頃(?)」『幼児の教育』第九十九巻第五号、日本幼稚園協会、二〇〇〇年五月、十五頁

## 編集後記

最近、娘にせがまれて子犬を飼いだした。ペットショップの店員に「最初の1週間は新しい環境に馴れるのに精一杯なので、充分寝かせて、かわいいからとあまり構わないこと」と指導される。

「そんなの人間のじゃない、いや、犬はそもそも人間ではなかった」という混乱状態の中、そのアドバイスを守ろうとすると、心を鬼にする感覚があった。人間の子を育てる方が、人としての理解を頼りにできるという意味ではラクなのかもとも思う。

似たような混乱状況の中、初めて人間の親になる人が多いのかもしれない。赤ん坊が泣いてもすぐ抱いてはいけないのではないかと、あふれかえる育児情報の中で思い悩む現代の親の気持ちがとてもよくわかるような気がする。(H)

## 幼児の教育 第108巻 第2号

平成21年2月1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集部 永山 綾  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社 フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円 (本体524円)  
©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵 ヨシエ  
扉カッター ヨシエ  
扉題字 津守 眞  
カット 田崎トシ子  
編集委員 上坂元絵里  
高橋陽子

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

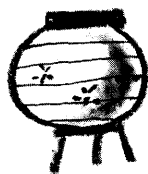
## 次号予告

### 〈特集〉子どもと春

江波諄子・安部富士男・石動瑞代・渡辺敏

- ・「園長のまなざし」第3回 高橋悦子
- ・韓国の障害児保育について 金允貞

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



## ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始まりました！  
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"  
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。  
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。  
ご意見ご感想などは、[youjimap@yahoococ.jp](mailto:youjimap@yahoococ.jp)までお寄せ下さい。

保育に活かせるアンパンマン新シリーズ誕生

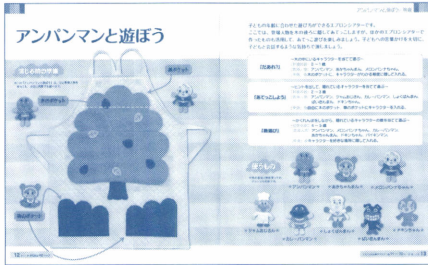
手づくりアンパンマンといっしょ③

# エプロンシアター<sup>®</sup>

中谷真弓/著

子どもたちに大人気のアンパンマンを手づくり作品で楽しむ実技書の第3弾！  
「ジャムおじさんの誕生日」「アンパンマンと遊ぼう」「だあれ？」「あてっこしよう」「数遊び」「みんなでカレーパーティー」「みんなでおかたづけ」など、乳児から幼児まで楽しめる遊びや生活習慣に役立つエプロンシアターを紹介しています。

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)



10903

好評  
発売中!!

## わくわく☆おもちゃ かんたん ギフト



10901

島田明美・尾田芳子・チーム Yamy/著

26×21cm 88ページ 定価 1,995円(税込)



10902

千金美穂・尾田芳子・あかまあきこ/著

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

「環境保育」って何？

「子どもが大切にされ、自然・人・地域・社会としっかりつながって育てられてこそ、環境教育の土台ができる」それが、環境保育！

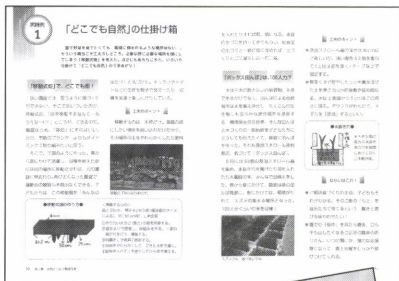
# いつでもどこでも 環境保育

—自然・人・未来へつなぐ保育実践—

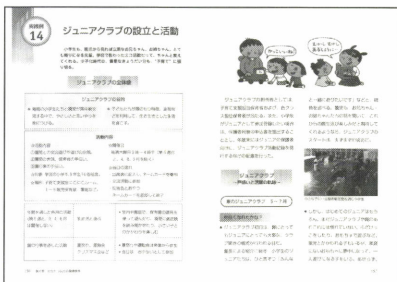
有賀克明 / 編著

乳幼児にかかわる仕事こそ、地球の未来を切り拓きます。自然につながり、人・地域・社会とつながる保育を通じて、環境教育のしっかりとした土台を築き上げる新しい保育思想と実践、環境保育の誕生！

21×15cm 224ページ 定価2,100円(税込)



10730



はじめに

CONTENTS

- 第1章 環境保育はいつでもどこでも
- 第2章 自然とつなぐ環境保育
- 第3章 人とつなぐ環境保育
- 第4章 社会とつながる環境保育
- 第5章 子どものつぶやきに学ぶ環境保育
- 第6章 座談会 子どもと自然と環境保育

環境保育実践と明日への希望  
おわりに

キンダーブックの **フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆